

高齢者大学文芸部 1月歌会

病みて三年癒ゆるあてなき此の夫と二人して聞く
除夜の鐘の音 中津 ツユ
老いたれど三年日記求めたりまだ健やかに未知を
行きゆく 岩木タエ子
ダイケアのりハビリ終へてすこやかに又新たな年
年を迎へむ 宮本サチ子
書き継ぎし三年日記の数冊にわがひたすらの歳月
が見ゆ 山下 菊代
霜枯れのさびしき庭の片隅に青々伸びし彼岸花の
葉 小池ミエ子
元日のしづけき空をかき乱し初雪吹雪く朝とはな
りぬ 岡本 トシ
短歌との出会ひに今日も希望湧く明日へ繋がる年
の初めに 河津 トヨ
正月は家族揃ひてかるた取り菊池の歴史われ声高
に 今坂 文字
白寿なるわれを祝ぐとて孫よりの年玉いだき涙こ
ぼる 氏岡 百枝
鞍岳と八笈ヶ岳に抱かれてわが生かざる菊池の
生活 たつき 川口 敦子



万句の里俳句会 12月句会

竹林の洩れ日揺らして笹子鳴く 東 鈴子
青空に吸い込まれ行く冬桜 打出 貞
寒天や叩けば音の返りさう 隈部 輝子
枯木立透かして広き城下町 田島 房子
散る紅葉散り敷く黄葉古城跡 加藤 妙子
木の精の呟きのごと冬桜 北村 妙子
遙かなる枯山もまた美しきもの 平山 邦子
音もなくはらり山茶花崩れけり 宮本 雅子
野良猫に声かけてみる漱石忌 林 まつ子
神の庭埋めつくさんと銀杏散る 富田 幸子
きわまりし銀杏落葉の神の庭 松永 久子
蘇る力密かに冬木の芽 中路 郁子

肥後狂句桜会 例会入選句集より

商売人 損する道も知つとらす 小川 繁美
運だめし 仕手株買うて大火傷 狩野 本六
さすがベテラン 惚れたふりして取るチップ 須藤 新生
人気のよき 笑顔振りまく美人ママ 高倉 新米
運だめし そるかるだつた競馬狂 太田 雄三
もっこすが 盆正月にやがまださす 田尻 浩風
さすがベテラン 国産牛は見分けらす 田中 孝幸

泗水短歌会 12月詠草

霜に枯れ花の乏しくなる庭の遅咲き菊に蝶ら寄り
くる 大島 ひと
初霜の強きにひれ伏す馬鈴薯の実の絶ちたる自然
のちから 高藤タツノ
急変の寒波に蟻螂凍死せり夏色残し草をつかみて
平嶋きくえ
去年師走夫在りし日を胸に溜め喪中の年賀トボト
ボと書く 長尾はるみ
花みづきの紅葉散らず夕日に映えて一点灯る 中山 定子
木枯らしの荒ぶひと日に木戸楓只の落葉と吹き寄
せらるる 福原美智子
新しき補聴器をつけ夕食の後の夜長は話題の弾む
増田久美子
町川の浅瀬の水面に尾を掲げ朝の狩りするあひる
の十羽 吉安 永子
八重咲きのピンクの山茶花満開なり夫在りし日に
植えしを偲ぶ 宮本 峯子

せせらぎ俳句会 閨汁忘年句会

娘に髪を切つて貰ふも年用意 坂本まつえ
閨汁鍋に思ひを込めて種入るる 藤本アツ子
庭の物皆しんしんと冬に入る 村山 数恵
我が歴史の中の閨汁半世紀 藤本 邦治
訛には訛で応え暮の市 五丁 義昭
閨汁の種を判ずる舌の先 服部 静子
閨汁会皆黙々と并に 寺本 和子
欠席の妻に閨汁持ち帰り 内村 泊虹

肥後狂句水笑会 12月例会

アイガモは 一役買った村興し 清原 英坊
一人暮らし 嬬はいまごろパリだろう 続 義昭
一人暮らし オーイお茶てち言ふてみる 杉本 芳正
急がにゃん 遅刻はされん初デート 宮上 美由
急がにゃん 一本しきや無アパスの来る 井手 水光
寒さ寒さ 炬燵の番で日の暮るる 中島 五女
落葉樹 もう始まった菊作り 吉岡 三水
寒さ寒さ 動かれんごつ着ぶくれて 平井 江彩
寒さ寒さ オーバ受け出す銭の無ア 神尾 凡骨

七城短歌会 12月詠草

お待ちどうさまと桃色山茶花が乙女の囁くように
咲き初む 斎藤 芳子
ヘッドライトの光りに跳び出づ野兔のふり向く眼
玉の鋭く光る 村上 幾雄
芋を洗い豆引き草取る計画しに容赦もあらぬ日が
傾きぬ 岩崎 照代
日に追われる我なる師走色づきし木戸の橙気忙さ
煽る 佐々 重弘
銀杏樹の下に暫く佇みて今日も元気に過ごさむと
思う 松岡ミチエ
読経の声しんみり身にしみ子等ともに夫二十五回
忌遺影に手合わす 水田紗陽子
障害者の後ろに並び手で肩をソフトに叩き歌う感
謝祭 緒方 寛子
未熟さが笑いを誘うグラウンドゴルフ打球がホー
ルを抜け行き来する 高木 精
竈にて二升の小豆炊きおりぬ薪の焔が昭和を呼び
寄す 木下 陽子
霜柱踏みて板橋渡るときぎしぎし音起ち柵掴まえ
る 池田カツ子

旭志文芸俳句会 12月詠草

霜がこい剪定すべて自分流 芹川のり子
ポケットに山栗鳴らし散歩径 芹川 蓉子
防人の守りし城跡草紅葉 水谷 ミネ
久方の秋のうるおい野菜伸ぶ 郷 ミヤ子
慰霊祭祝詞朗々と秋空へ 東 芳子
夫も孫も忘れ湯の宿秋の旅 中尾ヨシコ
小春日と思えば寒風雲広げ 出田みどり

